



アフリカ

No.120

NOW



サイザルバッグを作るケニア・カンパランドの女性たち（関連記事 7-9 ページ）

2013年1月 撮影：川越 朋子

CONTENTS



目次

特集：モノを通して考えるアフリカと日本

Special Topic: Objects that recognize the ties between Africa and Japan

キリマンジャロの農家経済経営とコーヒーのフェアトレード

辻村 英之 3-6

Farming household management and fair trade of coffee in Kilimanjaro

サイザルバッグでの成功と挫折 越えられなかったインフォーマルの壁

牛尼 恭史 7-9

Sisal bag business in Kenya: successes and setbacks

後ろめたさが香る、西サハラのタコ・マグロ

岩崎 有一 10-13

Taste guilty - octopus and tuna from Western Sahara

AKC リレーエッセイ第13回

アフロダンスで世界とつながりたい

オンウォナ アジマン 樹里亜 14-15

Connecting with the world through Afro dance

「国際保健と COVID-19」 ブログ記事から

ウクライナの事態で明らかになる「パンデミック下の不戦」の必要性

稲場 雅紀 16

The Ukraine situation reveals the need for "non-war under pandemic"

第12回世界貿易機関 (WTO) 閣僚会議、TRIPS免除の議論に幕引き

稲場 雅紀 17

12th WTO Ministerial Conference failed to ensure equal access to medicines

2022年度会員総会のご報告と新共同代表ごあいさつ

18

書評：川本 晴夫 著『ニジェールのドクター・タニ 外科医 谷垣雄三物語』

杉下 智彦 19

AJF 事務局から読者の皆さんへ～ひとつの結び目として／活動日誌

裏表紙

Objects that recognize the ties between Africa and Japan

モノを通して考えるアフリカと日本



コーヒーの木は直射日光を嫌うため、日陰樹（シェイド・ツリー）の木陰で栽培される
タンザニア・ルカニ村 2005年5月 撮影：辻村 英之



サイザルバッグの仕上げはバリカンで ケニア・カンバランド 2015年5月 写真提供：アフリカンスクエア



西サハラでとれるタコは、軍事占領するモロッコから輸出されている。築地市場の仲卸の札には「アフリカ」とあった
2018年10月 撮影：岩崎 有一

現在のグローバル化におけるモノの国際移動は、市場における財の交換として語られることが多い。だがモノの移動は、文化や技術、社会関係などのやり取りも伴っている。そして、モノを媒介として協力や連携、理解、交渉、対立などの相互関係が生み出されている。今号の『アフリカNOW』では、「モノを通して考えるアフリカと日本」と題した特集を企画。3本の論考を通じて、アフリカと日本のモノの移動・流通がもたらす複合的な状況について考察する。

辻村英之さんは、タンザニア北部のキリマンジャロ山西斜面のルカニ村で、農林畜複合経営と環境保全システムを持続させる農業が実践されていることを紹介。村で収穫されるコーヒーのフェアトレードでつながる日本の消費者との関係について、村の危機と再生の視点から解き明かしている。

アフリカ専門の輸入販売会社を経営する牛尼恭史さんは、ケニアの村で製造されるサイザルバッグを扱ってきた。ひとりのケニア人女性のリーダーシップによって、日本の消費者の要求水準を満たす良質のサイザルバッグの生産量が拡大された一方で、サイザルバッグ製造工場の経営悪化や不透明な経理によって、取引の停止と多額の負債を抱えた。アフリカの生産者との関係における成功と難しさの両面の経験を紹介している。

岩崎有一さんは、日本の店舗で「モロッコ産」と表示されているタコが、モロッコが軍事占領している「アフリカ最後の植民地」の西サハラ沖合でとられていることを報告。タコやマグロ、リン鉱石を介して、日本の消費者は西サハラとつながっており、資源の不当な輸出の問題を訴える西サハラ住民の声を伝えている。

※『アフリカNOW』119号に以下の間違いがありました。お詫びして訂正します。
11ページ本文左列上から7行目、「開発援助協力大綱」→「開発協力大綱」
付属の英文サマリーの2ページ Book Review の本文8行目、「Causa」→「Xhosa」

キリマンジャロの農家経済経営と コーヒーのフェアトレード

Farming household management and fair trade of coffee in Kilimanjaro

辻村 英之

Tsujiura Hideyuki

1. はじめに

2021年末から4ヵ月間で、単著（学術書）（『キリマンジャロの農家経済経営—貧困・開発とフェアトレード—』昭和堂）（写真1）を皮切りに、監修の童話（作：村上しいこ、絵：山田花菜『すべての人に健康と福祉を この指とどけ』講談社）と絵本（文・絵：ふしはらのじこ『コーヒーを飲んで学校を建てよう—キリマンジャロ・フェアトレードの村をたずねる』実生社）（写真2）の3冊が刊行された。単著の一部が童話・絵本の題材になっている。

その単著は、タンザニア北部・キリマンジャロ山の西斜面（標高約 1,500～1,700メートル）にあるルカニ村（人口 1,482名、世帯数355戸のチャガ民族の1農村）の農家経済経営を分析対象とする。国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産にも認定されたチャガ民族伝統の農林畜複合経営が、「コーヒー危機」により崩壊するものの、その後のフェアトレードの取り組み等を通じて復興しつつあるそのプロセスを、2002～2013年度における農家経営行動についての聞き取り調査、参与観察、および 2004～2005年の現金現物日記帳の記帳によって明らかにしたものである。

本稿は、テーマ「キリマンジャロの農家経済経営とコーヒーのフェアトレード」に該当する部分を同単著から抜き出し、その要点を整理したものである。詳細は同書を参照されたい。

2. ルカニ村における農家経済経営の構造（図1）

（1）2つの経営目標・行動 —「男性産物」と「女性産物」の経営部門

ルカニ村民は、山中にある家屋を取り巻く家庭畑

と、山麓にある草原を開墾した「下の畑」の2つの畑を持つのが一般的である。家庭畑ではコーヒー、バナナ、芋類、果物類などの栽培と、牛、羊、やぎ、鶏などの飼養がなされ、「下の畑」ではトウモロコシ、豆類、ヒマワリなどの栽培が営まれる。

これらの多様な農畜産物は伝統的に、「男性産物」と「女性産物」と呼称され、大きく2つに区分されている。コーヒー、トウモロコシ、牛、羊、やぎは「男性産物」、バナナ、豆類、芋類、果物類、鶏、さらには牛とやぎの乳は「女性産物」である。両者を分かつのは、特に経営目標と販売代金の支出費目（家計との経済関係）の違いである。

（2）「女性産物」部門の経営目標と家計との経済関係

1）「女性産物」と家計安全保障

「女性産物」は自家消費（食料の家計仕向）と少額の現金収入のための農畜産物である。その販売代金は、自家生産できない農畜産物や日用品の購入のために、すなわち生活必需品費（地元市場→生活必需品）として支出される。

そのため下記のように、本部門においては、年間を通して生活必需品をいかに確保するかに、重点が置かれる。つまり最低限の家計水準を維持する家計安全保障が、「女性産物」部門の経営目標となっている。

2）バナナ・牛乳の財布機能

^{ふんべん}分娩期が異なる2頭の雌牛の飼養により、年間を通じた搾乳が可能になっている。またチャガ民族の主食であるバナナの木（多年草）は、家庭畑に数え切れないほど植えてあり、しかも栄養繁殖する。つまり親株の根本（根茎）から、子株が自然に生え出て育つ。これらは基本的に自家消費用であるが、最近は販売量が増えている。

つじむら ひでゆき：1967年愛知県生まれ。京都大学農学研究科（農業食料組織経営学分野）教授。農業経営学、フードシステム論、開発経済論、協同組合論などをめぐる研究のかたわら、ルカニ村・フェアトレード・プロジェクトを実践。おもな単著に『キリマンジャロの農家経済経営』（昭和堂）、『農業を買い支える仕組み』（太田出版）、『おいしいコーヒーの経済論』（太田出版）、『コーヒーと南北問題』（日本経済評論社）、『南部アフリカの農村協同組合』（日本経済評論社）。

写真2



このようにルカニ村民は、家庭畑の面積（横の空間）が限られていることもあって、縦の空間を①疎林（高木・中木）、②果樹、③バナナ、④コーヒー、⑤芋類・豆類、

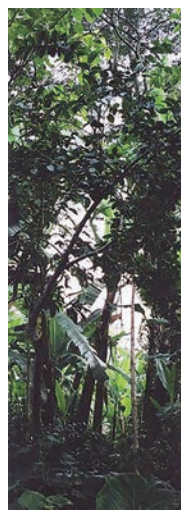
写真3



地元の青空市場におけるバナナ販売

2005年6月 筆者撮影

写真4



5層構造の農林複合経営

2003年3月 筆者撮影

の5層の構造とし、効率的に利用している（写真4）。

2) 農林畜複合経営と環境保全

この農林複合経営には、畜産が相互補完的に組み合わせられている。家畜のふんは堆肥化され、バナナやコーヒーの木の根元に施肥される。さらにバナナの葉や牧草などが、家畜の飼料とされ、ここに複数の産物が強い補完関係を持つ、農林畜複合経営のシステムが完成する。

以上の説明から、「男性産物」であるコーヒーの木に対して、「女性産物」であるバナナや果樹、そして疎林や堆肥（家畜のふん）などが養分や水分を提供するという補完関係を確認できる。これらが地力の消耗を補うことで、高価な化学肥料を利用しない、低費用でのコーヒー生産が可能になっている。

このようにルカニ村におけるコーヒー生産は、大農園における近代的生産のように森林を完全に開墾するのではなく、それを疎林として残し、その高木・中木を日陰樹（シェイド・ツリー）として活用している。

このキリマンジャロ山中の住民が共有する農法は今や、農林畜システム型アグロフォレストリーの代表事例として、世界的に有名になっている。2011年にはFAOが、キリマンジャロ山・中南部の他村のものを世界重要農業遺産システムとして認定した。

3. コーヒー危機の影響

以上のようにルカニ村における農家経済経営の構造を把握できれば、コーヒーの価格変動が村民の経営・家計・生活に与える影響を、分析することが容易になる。

2001～2002年にかけて、ブラジルの豊作とそれとともにニューヨーク・コーヒー先物市場からの投機資金流出（投機家の売り抜け）を主因とし、国際価格は「史上最安値」の水準にまで落ち込んだ（最低時には41.5cents/poundまで降下）。「世界の2500万人のコーヒー生産者が貧困にあえぐコーヒー危機」と呼ばれ、世界で最も深刻な問題とされた。

コーヒー危機の前からコーヒーの国際価格は低迷傾向にあり、ルカニ村民たちは農業経費を削って経営費をゼロに等しくし、なんとかコーヒー生産を持続させてきた。しかし病虫害が流行し、収穫量と品質が大きく低下した。

①コーヒー産業の危機：経済面の危機

さらにコーヒー危機の影響で、下記のように、コーヒー販売収入で教育経費を満たせないことがあからさまになり、村民たちのコーヒー生産意欲は一気に減退した。

他産物（特にトウモロコシ）の生産や、街への出稼ぎに力を入れる村民が増え、コーヒーの収穫量は半減してしまった。

②農林畜複合経営の危機：環境保全面の危機

しかしながら、コーヒーを超える魅力的な換金作物は容易には見つからず、また街におけるフォーマル部門での雇用は困難であった。

その結果、森林破壊が進展してしまった。街での雇用に恵まれない一部の若者が、現金の必要性に駆られ、家庭畑にとって大切な「ムルカ」を含む高・中木を積極的に伐採し、街の材木店に販売するようになった。さらに「下の畑」でのみ生産されていたトウモロコシが、上の家庭畑へ侵出してきた。利益を得られないコーヒーの老木を伐採し、その跡地にトウモロコシが植えられた。その場合、コーヒーだけでなく、樹木やバナナまでも伐採し、直射日光をトウモロコシに当てるのが優先される。やはり森林破壊が促されてしまった。

③教育・医療費への影響：教育・保健面の危機

コーヒー販売収入の激減で授業料を支払えなくなり、中学を休学する子どもたちが増え、退学する者もいた。

また保健衛生面についても、村唯一の診療所における診察をできる限り避けたり、診察を受けても支払いができない状況になった。出稼ぎが進んでさらに利用者が減り、診療所は閉鎖に追い込まれてしまった。

④食料保障機能への影響：家計安全保障面の危機

「男性産物」コーヒーの販売収入の激減は、それに



フェアトレードの還元金で完成したルカニ中学校
2007年12月 筆者撮影

次ぐ「男性産物」トウモロコシのみならず、「女性産物」バナナの過剰販売にもつながった。

まず上記のように、トウモロコシが家庭畑へ侵出しバナナも伐採された。また価格上昇時、3〜4グループの仲買人が入れ替わり村に現れ、ほぼ毎日、軽トラックの荷台いっぱいのバナナを村から引き出した。さらに一部の村民たちが、バナナ販売グループを設立して、自らバナナを村から押し出した。

その結果、干ばつの被害があった年のクリスマス、大切な訪問客に主食のバナナをふるまえない事態が生じてしまった。

4. フェアトレードの役割

フェアトレード〔①最低輸出価格の保障+②フェアトレード・プレミアム（産地の社会開発に利用される還元金）の支払の2つの買い支え〕の成果として、コーヒーの販売収入が上昇すれば、上記のコーヒー危機とは逆の影響が生じる。

筆者たちは、上記のコーヒー危機の悪影響を目の当たりにし、また村民たちからの要望を受けて、②の買い支えのみのフェアトレード・プロジェクトを2001年に開始したが、2007年以降は①②の買い支えを備えた本格的なフェアトレードになっている⁽¹⁾。

まず②の買い支え方〔23cents/pound（国際基準の1.4倍）の還元金支払〕で、図書室の完成、中学校の完成（写真5）、コーヒー加工場・苗木場の整備、耐病性が高い（無農薬栽培を可能とする）新品種コーヒーの苗木普及、保育園・塾の教材購入などを実現した。

さらに①の買い支え方〔171cents/pound（国際基準の1.4倍）の最低輸出価格保障〕のおかげで、新設のルカニ中学校（上記の還元金支払で建設費の約2割を負担）における、子どもたち2名の教育経費を捻出できることがわかり、村民たちはすぐに、コーヒー生産の意欲を取り戻した。

同村の農協が主体となって、まずはコーヒー（有機

生産可能な耐病性を高めた新品種）の苗木、そして日陰樹用林木の苗木を村民たちに配布し、コーヒー産業の復興に努めはじめた。さらなるトウモロコシへの転作、バナナの過剰販売は止まった。森林破壊も止まり、苗木の成長にともなってアグロフォレストリーが回復していくだろう。

森林やアグロフォレストリーの完全なる復興には数十年かかるが、街に出稼ぎに出た若者たちの帰村も進んで、「コーヒー危機」で25トン（2003年）に半減した収穫量が、危機前の水準を超える65トン（2017年）にまで回復した。

日本の消費者市民に買い支えてもらったおかげである。消費者のコーヒーの買い方、飲み方次第で、地理的に遠く離れた産地、そこに住むコーヒー生産者の持続的発展に貢献できることがわかる。

5. 「アフリカ型」農村開発の探求

アフリカの農業経営の優れた特性は、ルカニ村の「男性産物」のような換金作物による利益追求目標・行動ではなく、「女性産物」経営のように、食料作物による家計安全保障目標・行動という共同体（相互扶助）^{ほんちゆう}的伝統の範疇にある。ルカニ村においては、「女性産物」経営と相互扶助システムによる二重のセーフティネットが、村民たちの福祉水準を下支えし、貧困削減に貢献している。このような、伝統的社会保障制度（セーフティネット）の維持・強化を開発の目標・基礎部分に位置付けることが、農村開発の「アフリカ型」と考えると考える。

しかし日本政府は、主導するアフリカ開発会議（TICAD）において、農業・農村開発を「人間の安全保障の確立」ではなく、「成長の加速化」の中に位置付けてきた。さらには「自給自足からもうかる農業への転換」を強調し、農業の収益性や生産性の引き上げを最重視する。

ただし換金作物による利益確保は、福祉水準を引き上げるために必要である。その販売収入で十分な福祉引き上げが見込めない場合、たとえばルカニ村民にとって、「男性産物」販売収入で教育経費を捻出できない場合、食料作物の過剰販売（ルカニ村民にとっては「女性産物」の「男性産物」化）で、家計安全保障が弱体化してしまう。

「アフリカ型」農村開発の基礎部分とすべき、家計安全保障目標の食料作物生産の水準を維持するためにも、利益追求目標の換金作物生産は必要であり、「コーヒー危機」以前・本格的フェアトレード導入以後のルカニ村のように、両作物経営のバランスが重要なのである。

(1) 詳しくは、<https://tsunji.wixsite.com/mysite>、を参照されたい。

サイザルバッグでの成功と挫折

越えられなかったインフォーマルの壁

Sisal bag business in Kenya: successes and setbacks

牛尼 恭史

Ushiamo Yasushi

日本のマーケットが求める品質を求めて

AJF の会員でアフリカ専門の輸入販売会社、アフリカンスクエアーを経営している牛尼です。アフリカの商品と生産者とのかかわりをテーマに書いてほしいとのことだったので、ケニアのサイザルバッグを生産する工房を営む女性Aを取り上げることにします。彼女は弊社にとってもっとも深いつながりをもっていた生産者で、15年以上にわたり協業を続けてきました。最終的には多額の損失を被り、関係を切らざるをえなかった失敗の記録です。アフリカの小規模クラフトの生産者とのかかわりの難しさをアフリカでビジネスやNGOの活動をしたいと考えている人たちに伝えておくのも意味があると思いました。

弊社の目的はアフリカの優れたものを日本のマーケットに紹介することです。優れたものを見つけることができれば、それを購入し日本で売るだけです。生産者との関わり方はそれほど緊密なものではありません。食品についてはおいしくて安全なもの、民芸品やバッグなどのファッション雑貨については、作りがよく、日本人の美意識に受け入れられるものを探し出して、日本のマーケットで営業し、売るという業務を続けてきました。しかし1992年の創業から10年が経過したあたりから、商品輸入の仕方が変わってきました。特にファッションのアイテムについては、日本の流行や消費者の好みや需要に合わせて、特別な商品を生産者に注文するようになり、販売量は増えていきました。特にケニアの伝統的な民芸品である、サイザル麻の手編みのバッグは、日本のファッション業界の要望を満たす品質とデザイン性のあるものが作れるようになり、注文は飛躍的に増えていきました。

ケニア女性Aの驚異的ながんばり

この立役者となったのが、生産地で作られたバッグを首都ナイロビのマーケットに運んで販売するいわゆる「運び屋」をしていた、ある若いケニア人女性Aで

した。週末に人の集まるナイロビのカリオコマーケットにはサイザルバッグの生産地から英語の堪能な女性たちが、たくさんのバッグを持って売りに来ていました。彼女らは生産者たちの期待を一身に担い、観光客や店、販売業者にバッグを持ち込むのです。普段は小学校の先生をしているというような人もいて、地方のリーダー的な女性が多かった。弊社は当時、こうした運び屋が持ってきたバスケットのうち、よいものを購入し日本に送っていました。2005年ころの話です。その場で買い付けられる量などたいしたことはないため、確実な供給ルートを作るため、運び屋の女性たちに注文するようになりました。その中でもAはすぐに頭角を現してきました。やる気とバイタリティーのある女性で、弊社の JICA 海外協力隊 OB のスタッフからの難しいリクエストに応え、品質のよい製品を作り、だんだんと量産もできるようになっていきました。

手作りで、高品質でしかも指定のサイズスペック通りのバスケットを大量に作るのは大変な仕事です。日本のファッション業界から要求される条件は結構厳しい。たとえば、編みの細かさを保証するために1cmの幅の中に入る糸の数まで指定されます。模様を編み込む場合も糸1本ごとに色の指定を受け、糸1本分違っただけで仕様違いになってしまうこともあります。背中の子ちゃんをあやしながらのんびりと編み棒を動かしている女性たちの姿は、サイザルバッグ製作の地域ではおなじみの光景ですが、適当に手を動かせばできるような仕事ではなく、実はかなりの技術と集中力を必要とされるのです。

こうした良質のバッグを大量に作るためには、編み手の数を増やし、製作指導をする必要があります。村ごとに生産者のグループを作り、それを増やしていく。それぞれのチームにリーダーを決め、編み子たちを指導・監督させなければなりません。組織を作っていくのは大仕事です。

サイザルバッグを作っているのはカンバランドと呼ばれる乾燥した地域で、乾季は農業ができない貧しい地域です。その地域のすみずみまで各村を回り、生

うしあま やすし：1957年東京生まれ。大学でフランス文学をかじり、卒業後、5年間にわたりアフリカ33カ国を旅する。1992年アフリカ専門の輸入会社、有限会社アフリカンスクエアー（<https://african-sq.co.jp>）を設立、ファッション雑貨と食品の輸入を行う。今年30周年を迎えた。

産者のグループを増やし、最盛期には約50グループ1,500人の編み子が組織されました。同時に、糸の染色施設、材料や完成品のストック施設を建設し、生産量を増やしていきました。2016年に生産個数は年間3万個を越え、弊社の購入額も数千万円に達しました。ここまでに10年かかりましたが、ケニア人女性リーダーの驚異的ながんばりによる起業・成功物語でした。

生産者と地域社会への影響

実はこの地域、今まで生産者を組織してビジネスを拡大しようとする試みは何度もありましたが、いいところまでいってことごとく失敗しているのです。デンマークのNGOが入って良質のバスケットを生産、輸出もしていましたが、外国人が工房をケニア人に譲渡するとすぐに、スタッフによる運営資金の横領が起こり破綻しました。ケニア人の実業家がデザイン性の高いサイザルバッグを作らせ、世界の見本市で紹介し、輸出ビジネスを試みましたが、現地の生産者をまとめきれず生産できず事業をやめています。田舎のコミュニティとうまくつきあい、生産者の女性たちをうまくまとめあげていくのは大変な仕事なのです。Aも一度は生産地の人々の嫉妬を買い、アトリエを自分の生家の地域に移転せざるをえませんでした。また何度も材料の盗難や前払金の使い込みにあっています。

ともあれ、10年以上の継続的な買い付けは、この地域の人々の生活に一定の影響を及ぼしていたことは確かだと思います。ぼろぼろの服をまとっていた編み子の服もこざいになり、多くの編み子が携帯電話をもつようになり、生活水準の向上も明らかでした。2015年に私も初めて村々を訪問しましたが、各村で歌と踊りによる歓迎を受け、花の首飾りや鶏をプレゼントされました。干ばつで食うや食わずの時に、サイザルの仕事によって、食いつなぐことができたという話もその時に聞きました。地方にあっては、月1,000～2,000円程度の現金収入であっても貴重であり、女性が現金収入を得ることで、家の中でも一目置かれるようになり、自信を持てるようになったという女性もいました。

弊社も継続して注文できるように日本で営業努力を行い、工房の事業継続のため長期の無利子融資を行い、注文した分については、生産や工房の運営が困らないだけの前金を払っていました。買取価格についても、すべての経費や利益、編み子への支払い金額をAから出してもらい、その数字をもとに、両者の話し合いで決めていました。この地域での通常の買取価格よりかなり高い金額で買い取りを行っていました。

工房の経営悪化

発注量はさらに増えて、だんだん生産が追いつかなくなってきました。前払金も増えていきます。複数の注文が重なり、生産グループも多岐にわたってくると、前払金の管理は簡単ではありません。そうこうしてい

るうちに、注文品の納品のたびごとに払うべき残金以上の支払いが要求されるようになってきました。編み子に支払う金がないので商品を回収できない、少し金を貸してくれという要求です。弊社としては顧客からの注文を受けているので、約束通りに納品できなければ信用を失います。またAは材料のサイザル麻や染料を大量に在庫しており、アトリエのスタッフや契約している編み子もいるので、弊社が生産を止めさせるわけにもいきません。少しずつ追加融資を続けざるをえませんでした。毎年シーズンの初めに、資金計画と一緒に立てて、買取価格を決めたうえで注文をするのですが、計画通りにいかず必ず資金がショートしてしまうのです。

資金が不足する原因を突き詰めていく中で、彼女が銀行からもかなりの額の借金をしていることがわかりました。返済と利子の支払いがかなりの額になっていたようでした。さらに弊社から受け取っているサイザルバッグ事業の資金で土地やアパートを購入したり、パイロット志望の息子の教育に使ったりしていることもわかりました。

このころからサイザルバッグの日本での販売に陰りが見えてきました。注文を減らしたかったのですが、急に注文を減らしたら工房の運営は行き詰まる。しばらくの間は在庫がたまっていきますが、同じように注文をしつつ、徐々に工房や編み子グループのリストラをしていくしかありませんでした。日本での増えた在庫をなんとかさばくためにオーストラリアや台湾の展示会にも出店して、新しい販路を求めましたが、結果は芳しくありませんでした。

Aの工房の経営悪化の原因を探り対策を立てるために、アトリエの財務状況や日々の経理の情報を開示してもらう必要がありました。銀行通帳の開示を要求したのですが、見せてもらえませんでした。現実を直視せず、必要な行動をとらず、その場にしがみこんで場当たり的に必要なお金を要求することが続きました。弊社への債務についても正確に把握していなかったもので、弁護士を立てて、債務金額と返済方法の確認文書を交わすこともしました。

乗り越えられなかったインフォーマルの壁

そのころ別の心配が出てきました。取り扱い金額が多くなったので、税金の問題をきちんとしないと大きなペナルティにつながる恐れが出てきたのです。ケニアの事業所の所得や税金はデジタルで管理されるようになってきました。サイザルバッグの事業者は規模が小さいのでほとんど非課税で、いわゆるインフォーマルセクターでの取引といえます。他のクラフトの生産も大多数はインフォーマルで通常の税金のシステムの外にあります。所得を把握されて、厳密に税金を課税されることはありません。どこの国でも事情は似たり寄ったりで、インフォーマルの生産者はほとんどの場合、インフォーマルのままなので、あまり税金の問題を心配することなく、比較的簡単に取引を続けること

展示会で展示するサイザルバッグ。お客から注文を取る
2015年8月 東京五反田 写真提供：アフリカンスクエアー



ができるのです。インフォーマルな生産者が急成長し、きちんとした会社にし、帳簿や申告に基づいた税金を払うフォーマルセクターに入ることはきわめて珍しいのです。

Aの工房の取引額はすでにフォーマルの事業者の規模になっていました。それだけ起業家として彼女ががんばったといえるのですが、インフォーマルからフォーマルに成長するには乗り越えなければならない高い壁がそびえていました。それは経理事務の壁です。少なくとも簡単な会計の知識を身につけ帳簿をつけ、資金管理を行っていかなければ、フォーマルセクターのビジネスはできません。自分でできないのであれば、会計知識のある人を採用しやってみよう必要があります。債務返済の交渉をしながら同時にフォーマル化に対処するための助言や援助も申し出たのですが、経理の情報を開示されなければ方法を考えることもできません。結局、合意には至りませんでした。

修羅場から取引停止へ

2018年春、例年のように、日本の顧客から受注し彼女に発注を行っていたバッグが出来上がっていました。必要な支払いを済ませたのち、あとはコンテナへの商品の積み込みを残すだけでしたが、修羅場となりました。コンテナに載せる商品の金額をもう一度払わないと送らないと言い出したのです。商品はできているけれど、編み子や原料、スタッフへの支払いが滞っていたのです。未払いの編み子からもかなり突き上げられているようで、彼女も必死でした。結局、編み子などへの未払い金額を計算し、弊社が400万円を補填することで出荷にこぎつけました。送金しても出荷してくれる保証はなかったので、送金した後、こちらでトラックを用意し、弊社スタッフが同乗し、コンテナの倉庫まで運ばざるをえませんでした。商品が人質で、その解放のために^{ほんろう}翻弄されたのです。ケニアだけではなくアフリカで小規模生産者とビジネスをしているとこうした状況に^{どうかつ}追い込まれることは多々あります。「弱者」からの恫喝で、身代金を払わざるをえなくなるのです。

Aとの信頼関係は完全に崩れました。翌年の日本の

サイザルバッグの製作指導風景。手前のジグザグ柄は難しい
2011年10月 カンパランドの村
写真提供：アフリカンスクエアー



顧客にむけた特別な営業は中止せざるをえませんでした。弁護士立会いのもとで作った現実的な借金の返済計画は実行されず、翌年、債務はさらに膨れ上がっていました。これ以上続けることは限界だと判断し、取引を停止しました。数千万円の債務が損失となり、無理して購入していた1500万円分のサイザルバッグの在庫が残り、重い負担になりました。取引停止の経営判断が遅かったため深追いして傷を深めてしまったとも言えますが、それだけ弊社もAとの協業で生産地にしっかりとしたケニア人の会社を作りたいという大きな夢があったのです。

失敗からの学び

この一件は弊社にとって大きな挫折で、アフリカにおけるビジネスの難しさを改めて痛感することになりました。弊社の基本的な考え方として、アフリカでの事業については間接的に関与していくという方針がありました。つまり事業の主役はアフリカの現地の人であるべきで、日本人が出ていって主役になる必要はない。われわれよそものは友人としてつきあい、最低限のサポートをしていくのが本来の在り方だという考えです。おそらく日本人がケニアの田舎に住みつき、起業して同じような事業を行ったとしても、うまくいかなかったと思います。1,500人以上の編み子を管理し、田舎の各コミュニティと良好な関係を維持し、あまりクリーンだとは言われていない行政組織と問題を起こさずに事業を拡大させていくのは難しかったのではないかと思います。われわれにはわからない商習慣や社会のしきたりのようなものもあり、Aという傑出した人物がいたために事業を拡大させることができたのでしょう。

しかし振り返ってみて、急成長の兆候が出たとき、フォーマルへの移行も見据えて、もう少し直接的な関与を増やし、ビジネスとして必要な基礎的なことを学習させる必要があったという反省もあります。もしかしたら早いうちに合弁会社などの形にすれば、今でもまだ夢に向かってAとともに走っているかもしれない。だがそれも、Aのパーソナリティーを考えると大変な仕事だったのでないかと思います。

後ろめたさが香る、西サハラのココ・マダロ

Taste guilty - octopus and tuna from Western Sahara

岩崎 有一

Iwasaki Yuichi

産地「アフリカ」

案外、知らずして、私たちは日々アフリカから届いた食品を食べているものだ。

2018年秋、廃止される前の築地市場を取材中、仲卸の店頭で「アフリカ」の札がつけられた蒸しタコを見つけた。産地を「アフリカ」とする値札は、他の店でも見られた。産地表示としては、いくらなんでもおどろきすぎる。ある仲卸で声をかけてみた。

「(蒸し) タコと言えばアフリカでしょ。昔からそうだったよ」

築地で働く人々が、アフリカの国名を知らないというわけではない。聞くと、蒸しタコの原料となる輸入の冷凍タコの産地は、モーリタニアとモロッコで大きく二分されてきたため、その総称として「アフリカ」と記すのが慣例となっているとのことだった。

確かに、私たちはアフリカのタコにずいぶんとお世話になっている。

2020年度の水産庁と農水省の統計によると、日本国内のタコ漁獲量は32,659トンであるのに対し、同年の総輸入量は37,748トンに上る。近年、輸入元となる国の1位と2位はアフリカ諸国が独占。モーリタニアから14,064トン、モロッコからは11,776トンを入力している。日本で食べられているタコの約4割は、アフリカから届いたものだ。

「アフリカのタコ」の話をもう少し聞きたくなり、タコ専門の仲卸店を探して訪ねた。店主から解説をうかがうことができた。要約すると以下の通りだ。

輸入タコの産地としてモーリタニアとモロッコは定番だが、両国のタコには異なる特徴がある。モーリタニア産は壺漁がメインであるのに対し、モロッコ産はトロール(底びき網漁)によってとられたものが多い。トロールではタコに傷がつきやすく、壺漁に比べ品質が劣る。よって、築地で輸入タコを扱う際はモーリタニア産のタコが好まれている。近年は、地球温暖化の影響からか、アフリカの北大西洋沿岸におけるタコの漁場は南下しつつある。今はモロッコ北部でタコは

ほとんどとれず、輸入タコは南部のダーフラ港に揚げられるらしい。

店主は話を続けた。

「モロッコ産とは言うけれど、ダーフラがあるのは西サハラってところなんだよね。まだ独立が決まらずで、現地の住民とモロッコがもめていて、独立派が今も戦っていたりするところらしいよ」

日本国内で「西サハラ」を聞くことはめったにない。さすが、築地。西サハラ産タコの概略を、あまりにあっけなく、あっさりと知ることができた。

現地ではもめていて、独立派が戦っているらしい西サハラとは、どんなところなのか。

スペインは放棄し、 モロッコが軍事侵攻した

古来、西サハラには、アラブ語の一方言であるハサニーヤを話す、サハラウィと呼ばれる人々が暮らしてきた。

アフリカの植民地時代がはじまると、西サハラにはスペインが進出し、1884年にスペイン領サハラが確定した。その後アフリカで次々と独立が果たされていくなか、1973年にサハラウィの独立解放を求めるポリサリオ戦線が結成され、西サハラでの独立闘争が始まった。

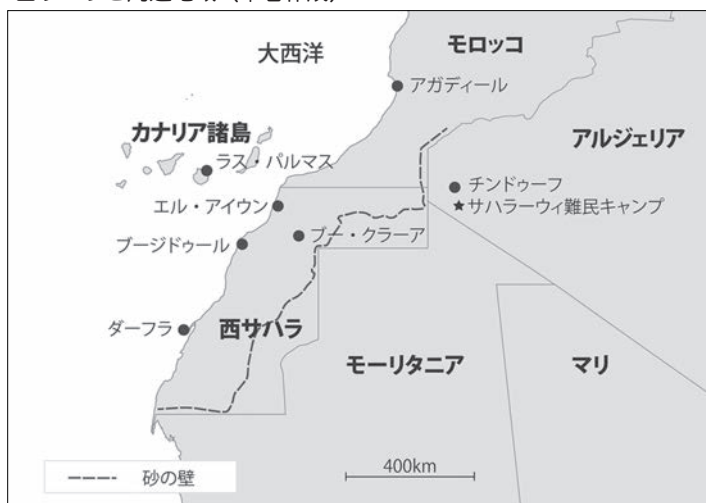
いっぽう、1975年にモロッコの民衆がスペイン領サハラへと越境を始め、「緑の行進」と呼ばれる民衆デモが起こった。民衆デモを装ってはいたが、これはモロッコ国王が組織した官製デモだった。民衆を守る名目で、モロッコは西サハラへの軍事侵攻を開始する。

モロッコは西サハラの解放を唱えていたが、西サハラがモロッコの支配下にあった史実はない。また、1975年に現地入りした国連調査団は、モロッコ人ではなく、ポリサリオを西サハラ住民の代表として認めた。

西サハラの宗主国であるスペインは1975年11月、マドリッド協定でモロッコとモーリタニアに西サハラ

いわさき ゆういち：ジャーナリスト。アジアプレス所属。アフリカ地域に暮らす人々の日常と声を、社会・政治的背景とともに伝えている。1995年以来、アフリカ全地域にわたる27ヵ国を訪ねた。近年の取材テーマは「西サハラ問題」「マリ危機と北西アフリカへの影響」「マラウイの食料事情」など。2005年より武蔵大学メディア社会学科非常勤講師。https://iwachon.jp

西サハラと周辺地域（筆者作成）



を割譲する密約を交わし、翌76年に植民地統治を放棄して撤退した。その後、モーリタニアは早々に西サハラから退き、ポリサリオとモロッコとの戦いが続く。モロッコの空爆を逃れて難民となったサハラウィたちは、アルジェリア領内のチンドウフに難民キャンプを建設。このキャンプは現在も存続している。

ポリサリオとモロッコが戦っていた1980年代、モロッコは砂の壁と呼ばれる分離壁を建設した。この2,700kmに及ぶ分離壁は、イスラエルの助言のもと、つくられたものだ。西サハラはこの砂の壁によって、「占領地」と呼ばれるモロッコが占領する地域と、「解放区」と呼ばれるサハラウィが統治する地域に分断された。

1991年、ポリサリオとモロッコは、西サハラの帰属は住民投票の実施をもって決めるとの国連和平案に合意して停戦。国連平和維持活動（PKO : Peacekeeping Operations）の西サハラ住民投票監視団（MINURSO : United Nations Mission for the Referendum in Western Sahara）が発足し、現地で停戦監視を続けてきた。その後住民投票は実施されず、30年にわたる停戦状態が続いた。

2020年10月21日、ゲルゲラートの緩衝地帯を縦断する道路上で、サハラウィが道路を封鎖して抗議活動を始めた。11月13日、モロッコは軍をもって抗議するサハラウィを排除。ポリサリオはこれを停戦協定違反として、モロッコ軍の拠点数カ所を砲撃することで応戦。停戦状態は終わり、現在も戦闘が続いている。

モロッコ国内では、西サハラ問題は存在しないというのが建前であり、西サハラは単に「サハラ」または「南部モロッコ」と呼ばれている。モロッコが軍事占領する西サハラの占領地内では、モロッコ国旗と国王の肖像画が街のあちこちに掲げられている。街並みも、車のナンバープレートも、携帯電話会社もモロッコと同じだ。西サハラ事情を知らなければ、ここはモロッコだとしか感じられない。

サハラウィ難民キャンプのあるチンドウフは、砂漠の中の砂漠と呼ばれるほど過酷な環境にあ

西サハラ最大都市エル・アイウンの中心部。街並みは、モロッコ国内と同じだ 2018年 筆者撮影



り、食料の多くを援助に頼った生活が46年以上続けられている。キャンプ内には、サハラウィが樹立したサハラ・アラブ民主共和国（RASD : República Árabe Saharaui Democrática）としての、すべての機能が備わっている。大統領府、外務省、運輸省、文化省といった組織が存在し、RASDは国連やアフリカ連合にも代表を置いている。

サハラウィによる民族解放戦線であるポリサリオ戦線が統治する内陸部は、RASD 解放区と呼ばれる。ポリサリオは、占領地、解放区、難民キャンプのサハラウィを統率し、世界各地に暮らすサハラウィとも連携し、外交力をもって西サハラの解放闘争を続けてきた。

今なお、西サハラの施政国はスペインのままだ。そして今なお、モロッコは西サハラへの植民を続けている。このような経緯から、西サハラはアフリカ最後の植民地とも呼ばれている。

さすが、築地

さて、築地で見かけた「アフリカのタコ」の一部は、ほんとうにアフリカ最後の植民地から届いたものなのだろうか。

2018年、私はモロッコ南部の街アガディールを訪ねた。ここにはモロッコ屈指の大きな漁港がある。モロッコでタコが多くとれるのなら、アガディールの市場はタコであふれているはずだと考え、アガディールの市場のひとつを訪ねてみた。

場内を練り歩いたが、タコはほとんど見えない。タコはどこにあるのかを、仲卸店のひとつに聞いてみた。

「タコならサハラだよ。良いタコは、サハラに揚がる」

他の仲卸で聞いてみても、こたえは同じだった。ある仲卸では、「サハラのダーフラに、タコは集まる」とも聞いた。

アガディールを離れ、西サハラの占領地に入った。西サハラの最大都市エル・アイウンでも、大きな魚河岸のある港町のブージドゥールでも、タコは見られな

かった。西サハラに入っても、「タコはダーフラに集まる」と言われた。

ダーフラに到着し、港へと向かった。船着場には、数えようのないほど多くの漁船が停泊していた。別の船着場では、トロール船の荷揚げの最中だった。タコも、あった。

ダーフラの荷揚げ港では、タコは、アラブ語でもフランス語でも英語でもなく、TAKO と記される。私が日本人だとわかったと、港で働く人々の中には、「タコー！」と言って声をかけてくる人もいた。いやおうなしに、日本がお得意様であることがうかがい知れる。

モロッコ国内では、輸出向けのタコはほとんど揚がっていないかった。トロール船でとられた西サハラのタコはダーフラ港に揚げり、日本に送られていた。すべて、築地のタコ専門仲卸の店主から聞いた通りだった。

タコだけでなく

西サハラから日本に届く水産物は、タコだけではない。

国際的な西サハラ支援団体である「西サハラ資源ウォッチ」から、西サハラ問題に取り組む日本の市民団体の「西サハラ友の会」に、ある知らせが届いた。「西サハラ領海内で操業を続ける日本漁船の積み荷を載せた運搬船が、現在、横須賀港に向かっていている。よって、その動向を確認されたし」との内容だった。2019年、私は横須賀港に向かい、対岸の岸壁から目当ての大型船を見つけた。

船名から、この船が冷凍運搬船であることがわかった。この船を所有する会社の業務内容は、遠洋マグロの運搬に特化している。岸壁には、「FROZEN TUNA」と記された大型トラックが停まっていた。船の軌跡は、自分でもトラッキングサイトで確認をしている。横須賀港に到着したこの運搬船の積み荷は、西サハラのクロマグロで、ほぼ間違いはない。

私は、日本の遠洋マグロ漁船の当事者から直接、西サハラでのマグロ漁についての言葉を聞きたかった。かと言って、自力で北大西洋に出ていくこともできない。さて……。

西サハラ沿岸から100kmほど先に、スペイン領カナリア諸島がある。カナリアの港は、アフリカ北西岸で操業する漁船の寄港地としても栄えてきた。日本の遠洋漁船との関わりは、長く深い。

2020年、カナリア諸島のラス・パルマス港へと向かった。港には、数隻の日本漁船が停泊している。船名から、いずれも遠洋マグロ漁船であることがわかった。そのうちの一隻に岸壁から声をかけると、「ま、中に入って」と、船長が快く応対してくれた。遠洋でのマグロ漁全般についてお話をうかがった後、西サハラ沿岸での操業について、単刀直入に聞いた。

「(西サハラで) としている船もいるね」と、船長。西サハラ領海内での漁業権はモロッコが販売してお

り、半年で300万円ほどとのことだった。西サハラの海で、日本の船がマグロをとっている。

直接目にする事のない「西サハラ産」もある。

肥料の原料として使われるリン鉱石は、日本ではその全量を輸入に頼っている。近年は中国やベトナムからの輸入量が多くを占めているが、モロッコからの輸入も長く続いてきた。

モロッコは世界有数のリン産出国ではあるが、西サハラの鉱山でとれたリン鉱石もモロッコ産として輸出してきた。スペインが西サハラのブー・クラアに発見した鉱山で採掘されたリン鉱石は、西サハラ最大都市エル・アイウンの郊外に設けられた専用の積み出し港から、世界各国へ向けて輸出されている。

2020年のある日、先述の西サハラ資源ウォッチから、エル・アイウンを出港した大型運搬船が日本へ向かったとの報が入った。その船は、北九州の門司港に着岸。私も現地に向かった。岸壁では巨大なクレーンが荒い砂状のものをつかみ出しているが、目視したところで、それが何かはわからない。作業中の男性に聞いた。「リン鉱石ですよ」と、教えてくれた。

野菜を介して、私たちは西サハラのリンも口にしている。

何が問題なのか

「アフリカのタコ」についてはさておき、モロッコのタコとする産地表示は、正しくない。

モロッコは西サハラ沿岸部を軍の力をもって占領しているに過ぎず、西サハラの帰属は未決のまま。そもそも、西サハラの港に揚がる水産物も、西サハラでとれるリン鉱石も、モロッコのものではない。

ダーフラ港に揚がるタコやモンゴウイカなどの輸出水産物が梱包される段ボール箱には、「モロッコ産冷凍食品」と予め印字されていた。この港は西サハラのダーフラだ。モロッコではない。私は、産地偽装の瞬間を目の当たりにしたことになる。

モロッコに、産地偽装している後ろめたさはあるようだ。このタコは西サハラのダーフラ港からは輸出されず、モロッコ国内のアガディール港にひっそりと運ばれた後、現地で日本の水産商社が、モロッコのタコとして買い付け、日本に輸入している。購入する側もアガディールで買い付けている限りは「モロッコでタコを買っているのです」との弁が立つ、という仕組みなのだろう。マグロについては、日本の制度では、日本漁船がとったマグロならば西サハラ産ともモロッコ産とも記す必要はない。西サハラに由来する食品であることを消費者が知る術がない現状は、公正ではない。

西サハラ住民は、西サハラの資源の輸出や消費を認めていない。

西サハラに暮らしてきた人々はサハラウィであり、国連は現在も、ポリサリオを西サハラ住民の代表

ダーフラの港では、トロール船からの荷揚げが続いていた。梱包される段ボールには「モロッコ産冷凍食品」と印字されている
2018年 筆者撮影



西サハラの領海から横須賀港に入港した、日本の大型冷凍運搬船
2019年 筆者撮影



として認めている。西サハラ住民の代表は、軍事占領を続けるモロッコ人ではない。そのサハラウィが、西サハラの産物が無断で消費され続けることに、強く反対し続けている。占領地でサハラウィから話を聞いていると、西サハラの独立が達成されないこと以上に、モロッコによる西サハラ資源の無断消費に怒る声を聞くことが多い。「西サハラの資源を使う権利は、いったい誰にあるのか？」との声を、占領地でも難民キャンプでも、何度となく聞いた。また、RASDは、西サハラ資源の無断消費に対する抗議を重ねてきている。現地の住民が、勝手にとらないでほしい、勝手に食べないでほしいと言っている産物を、日本が無断で消費し続けていい道理はない。

西サハラの資源から得られる富は、サハラウィには届いていない。

モロッコから西サハラへの植民が進んだ結果、占領地に暮らすサハラウィはマイノリティとされ、さまざまな差別を受けている。仕事の要職はモロッコ人に占有され、サハラウィは閑職にしかありつくことができない。占領地では、就業機会の不平等に異を唱えるデモが頻繁に行われている。

不平等と生活苦から西サハラの独立を求める声をあげたとしても、占領地内では難しい。モロッコでは、西サハラ占領政策に異を唱えることは違法であり、すぐに政治犯として逮捕されてしまう。占領地の街のあちこちに私服警官が潜み、目を光らせている。

「逮捕されるならば、まだいいほうだ」とも聞く。モロッコへの反意を示したサハラウィが、私服警官によってひっそりと連れ去られ、監禁、脅迫、拷問、レイプといった暴力を受けることは珍しくない。行方不明となることも多い。タコもマグロも、深刻な人権侵害に目を伏せてまで食べたいものではないはずだ。

タブーにせず可視化を

日本でも、日本以外の国々においても、西サハラの現状が伝えられることは極めて少ない。

占領地を訪ねることは簡単だ。今も多くの旅行者やビジネス関係者が西サハラを訪ねている。パリとダーフラを結ぶ直行便も就航した。占領地の街中で外国人を見かけることは珍しくない。ただし、ジャーナリストや人権団体、視察団など、西サハラ占領政策の現状を知ろうとする人物の西サハラ入域について、モロッコは堅く拒み続けている。よって、占領地の実態はなかなか伝えられてこなかった。

また、モロッコには世界各国から企業が進出しており、日本からも、100社を超える企業が現地に拠点を置いている。西サハラの資源奪取や人権問題に気がついても、占領政策に触れることで自らの商機を失うよりは、知らないふりをしてビジネスを続けるほうが有利との考えが働きがちだ。

とかく西サハラ問題は難解だと言われるが、何もややこしいことはない。

西サハラの帰属は決まっておらず、住民投票の実施をもって決めるとすでに約束されている。国連における西サハラ住民の代表は、サハラウィであるポリサリオだ。モロッコは、住民投票の実施を先延ばしにし、モロッコから西サハラへの植民を促し、軍事占領の既成事実化を進めてきた。サハラウィに対する弾圧も続いている。サハラウィは、モロッコによる西サハラの軍事占領、西サハラの資源奪取と消費、サハラウィに対する人権侵害のいずれにも、断固として反対している。

問題の構造はシンプルだが、現状の既成事実化を望むモロッコの思惑と、モロッコとの関係継続と西サハラの資源消費継続を望む声が、西サハラ問題をうやむやにしてきた。現地の実情を知ったうえでの、西サハラ資源の無断消費ならば、それは、深刻な人権侵害を伴うモロッコの占領政策追認につながりうる。

私たちはすでに、タコを介して西サハラとつながっている。残念ながら、西サハラのタコだけを避けてたこ焼きを食べることは難しい。問題の解決を願いながら、西サハラ事情の認識と共有を広げていきたい。

アフロダンスで世界とつながりたい

Connecting with the world through Afro dance

オンウォナ アジマン 樹里亜／ Onwona Agyeman Julia

子どもの頃の気持ちとダンスとの出会い

私は幼い頃、あまりガーナと日本のミックスであることに誇りや魅力を感じたことがありませんでした。日本生まれ日本育ちということもあり、ガーナの文化に触れることが少なかったことが大きな要因だったのかもしれません。小中高生時代のほとんどはカーリーヘアに縮毛矯正をかけ、邦楽を好み、日本を出てみたいという気持ちすらあまり湧くことなく過していました。週末父親によく誘われていた、ガーナ人が集まるパーティーは毎度当たり前のように断り、ミックスの子どもたちのための交流イベントにもあまり意欲的には参加していませんでした。「大切なのは人間性であり人種ではない」という気持ちが強かったため、自分のルーツにあまり興味を持つこともなかったのだと思います。

一方で、私は音楽好きな両親の影響を受け、幼い頃から音楽あふれる家庭環境で育ちました。特に楽しいと感じたのは音楽に合わせて踊ることです。私が初めて踊ったダンスはモダンバレエで、4歳の頃、母親にバレエ教室に連れていってもらったことがきっかけです。

高校ではダンス部に入り、ヒップホップダンスを踊っていました。部活では最高の仲間と出会い、毎日切磋琢磨しダンスを練習していました。

高校を卒業し大学に入ってもダンスを続けたい気持ちが強く、ダンススタジオで本格的にダンスを習い始めました。ヒップホップだけでなくさまざまなジャンルに挑戦したり、ダンスバトルに出場したりもしました。ダンススタジオに通い続けるうちに、気がつくとダンサーになりたいと思うようになっていました。

ロサンゼルスでの経験

私を大きく変えたきっかけは、大学3年生のときにインターンシップで1ヵ月半滞在したアメリカ・ロサンゼルスです。ヒップホップダンスに打ち込むうちに、踊りの部分だけでなくヒップホップの文化や歴史にも興味を持つようになりました。ヒップホップの発祥国であるアメリカに行き、生活してみたいという気持ちから、海外でインターンシップをすることに決めました。

ロサンゼルスでは毎日発見の連続で、刺激的な日々を過ごしました。キャストイング会社でインターンシップを

し、映画、CM、ミュージックビデオなどのキャストイングを学びました。さらに、世界で最も有名なダンススタジオが職場のすぐそばにあったため、仕事終わりに毎日通うことができました。ダンススタジオでは世界的に活躍している一流ダンサーのレッスンを受け、彼らのハイレベルなダンスを間近で見ることができました。

楽しい毎日を過ごす半面、自分の中で大きな違和感を持つようになりました。それは自分のルーツであるガーナのことをあまりにも知らなすぎる、ということでした。他の国のことを知る前に、まずは自分のルーツを学び、理解を深めたいと考えるようになりました。アメリカから帰国する際には、次に訪れる国は絶対にガーナにしようと決心していました。

ガーナ大学への留学

ロサンゼルスでのインターンシップから1年後、留学でガーナ首都アクラに6ヵ月間滞在することになりました。中学生の頃、父と弟とガーナを訪れたことがありましたが、長期で滞在するのはこの時が初めてであり、緊張と期待でいっぱいでした。コトカ国際空港に到着し街へ出ると、燦々とした陽光、砂ぼこりや人混みなど、日本とはかけ離れた環境が私を迎えました。頭の上に売り物を乗せて歩く人や、不思議な形をした木々が印象的でした。到着後の5日間はガーナ大学の寮で父と一緒に過ごし、父が帰国した後の期間は叔父の家にお世話になりました。

叔父の家に住み始めて間もなく、ガーナ大学での留学生活が始まりました。私はガーナを中心とするアフリカの伝統舞踊や音楽を学ぶために、パフォーミングアーツ学部舞踊研究学科を専攻しました。舞踊研究学科の授業は大きく分けてダンスとドラムの二つの授業に分類されます。ドラムの授業ではドラムの叩き方、伝統舞踊の演奏に使用される楽器の種類、ガーナ民謡の歌詞などを学びます。ガーナの民謡はシンプルなメロディーで覚えやすく、つい口ずさんでしまいます。ダンスの授業では伝統舞踊の種類や振り付けを学びます。ガーナの伝統舞踊は腰と胸を使った動きが多く、上半身中心のゆっくりとしたダンスから全身を使った激しいものまでさまざまです。ガーナの伝統舞踊の最大の特徴は、ドラムのリズム

おんうおな あじまん じゅりあ：1996年生まれ、愛知県出身。ガーナ人の父と日本人の母を持つ。現在、東京を拠点にダンサーとモデルとして活動中。アフリカンキッズクラブのダンス講師も務める。インスタグラム (@julia_agmn) と YouTube (Sista Gold) ではダンス動画や解説動画を載せている。今後はガーナ・アクラでも活動していく予定。

ムパターンに合わせて踊りの動きを変化させていくところです。ドラムの音に耳をよく澄まし、ドラムとリンクした動きのダンスをする必要があります。

私が最も印象に残っている授業での出来事があります。それは伝統舞踊の授業中に停電が起きたときのことです。アクラでは週に数回の頻度で停電が起きます。この時はちょうど先輩達が“Gahu”（ガフ）という踊りのお手本を見せてくれていました。Gahu はエウェ民族発祥のドラムリズムに合わせて踊るガーナの伝統舞踊の一つです。伝統舞踊の授業は夜間に行われていたため、停電と同時に教室は真っ暗になりました。暗闇に包まれた教室にはドラムの音と学生のざわめきだけが響き渡っていました。しばらく動けず床に座っていると、ある学生がスマートフォンのライトをつけ、教室にわずかな光が入ると、先輩達は暗闇の中でも Gahu を踊り続けていました。彼らがスマートフォンの光に照らされると、まるで舞台の上で踊っているかのように見え、とても神秘的でした。その神秘的な光景は教室にいた全員の心に響き、ざわめきが一瞬で歓声へと変わりました。暗闇で踊られる Gahu を見て改めて伝統舞踊の強さと美しさに気がつき、自分のルーツを大切にしたいという気持ちがいっそう強くなりました。

AFRIMA へのオーディション

留学生活が終盤に差し掛かっていた頃、オーディションに参加してみないかとダンサーの友達に声をかけてもらいました。それは African Union Commission (AUC) が主催している All Africa Music Awards (AFRIMA) という、アフリカで最も大きな音楽授賞式のオープニングダンサーを選出するためのオーディションでした。AFRIMA はアフリカのエンターテインメントの独自性を世界に発信することを目的としてさまざまな国で開催されており、この年は偶然にもガーナのアクラで開催されることになっていました。突如目の前に現れた大きなチャンスに驚きつつも、私は迷わず参加を決めました。

オーディションはアクラ市内にある国立劇場で行われ、100名以上のプロダンサーたちがガーナ国内外から集まりました。大規模なオーディションということもあり、選考は4日間に渡って開催されました。オーディションで最も緊張したのは、音楽を流さず無音の中で3分間踊る“アカペラ”と呼ばれる審査でした。無音の状態の人前で踊るのは初めての経験であり、とても不安でした。自分の番が回ってきて審査員の前に立つと、不思議と気持ちは落ち着き、頭の中を空っぽにして、ただ思いっきり踊りました。

3分はあっという間に過ぎて、審査員から一番初めにかけて言われた言葉は「これまでバックダンサーやミュージックビデオには何度出演したことがあるのか？ あなたのよう人の心を動かすパワフルなダンサーに出会ったのは初めてだよ！」という言葉でした。私は「バックダンサーの経験もミュージックビデオに出演したこともありません。私は日本からアフリカのダンスを学びに来ました」と答えると彼らは驚いた後、笑顔で「このオーディションであな

たような強い意志のあるダンサーに出会えてうれしいよ」と言ってくれました。その後の審査でも自分らしく踊ることができ、無事 AFRIMA のダンサーに選ばれました。

メンバー30人が決定すると、想像を超えたハードな練習の日々が待っていました。空調が完備されていない練習場はとても暑く、鏡もなかったため自分の動きを確認することもできませんでした。それでも最高のオープニングを作ろうとみんなで必死に毎日練習し、一緒に時間を過ごしていくうちに絆も深まりました。練習期間はあっという間に過ぎ、気がつくとは本番当日でした。

会場の駐車場には大手テレビ局のトラックがたくさん並び、見覚えのある有名なアーティストたちを舞台裏で見かけたりもしてワクワクしました。パフォーマンス直前には仲間のダンサー達と声を掛け合うことでお互いの気持ちを高めました。そして本番のステージでは達成感と喜びで気持ちがいっぱいになり、踊り終わった後には自然と涙がこぼれ落ちました。

帰国後

ガーナでの経験を通じて、ガーナと日本のミックスであることを誇りに思うようになり、両国のミックスである自分にしかできないことをしたいという気持ちが膨らみました。日本に帰国してからは西アフリカ発祥のストリートダンスであるアフロビーツダンス（アフロダンス）を踊り、SNS や YouTube での発信やイベントでのパフォーマンスを行ってきました。また、アフリカンキッズクラブのダンスクラスの講師として、アフリカにルーツを持つミックスの子どもたちにアフロダンスを教える機会も定期的に持つようになりました。

今後も日本とアフリカにルーツを持つダンスアーティストとして、ダンスで人を惹きつけ、世界のより多くの人にアフロダンスの魅力を知ってもらおうことが、自分の中の最大の目標であり、使命であると感じています。



AFRIMA 本番当日に仲間のダンサーと（後方右から2人目）が筆者（ガーナ・アクラ 2018年11月）

ウクライナの事態で明らかになる 「パンデミック下の不戦」の必要性

パンデミック下での戦争行為は感染症の急拡大や変異株の発生のきっかけとなる

The Ukraine situation reveals the need for “non-war under pandemic”

オミクロン感染の最大期にウクライナ侵攻

ウクライナ侵攻が開始された2月24日、ロシアの感染数は15万人を記録していた。一方、ウクライナもオミクロン株による感染拡大が山場を迎えていた。ウクライナは侵攻から1週間を経過した3月3日以降、新規感染数の報告ができていない。ロシアのウクライナ侵攻は、ウクライナにおける新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策を麻痺させている。ここで懸念されるのが、COVID-19の拡大と、新たな変異株の登場である。

戦争による大量動員や対策の停止が 変異株形成の温床に

米国の週刊誌『タイム』の記事「なぜウクライナの COVID-19 問題はすべての人の問題なのか」（‘Why Ukraine’s COVID-19 Problem is Everyone’s Problem’）では、もともとウクライナにおける COVID-19 ワクチン接種率は36%と周辺諸国よりも有意に低かったことや、戦争により、マスクや三密回避といった予防行動がとれないこと、軍による大量動員や、戦争からの避難など大きな人口移動の発生など、感染を拡大する要因が増えていることなどが、COVID-19 の変異株を生じさせるきっかけになりかねない、と懸念を表明している。

この懸念を裏書きするのが、ロシアの侵攻によりウクライナのコロナ対策が被ったダメージについてのレポートである。『ブリティッシュ・メディカル・ジャーナル』に掲載された「ウクライナの COVID-19 のダイナミクスへの戦争の影響」（‘Impact of war on the dynamics of COVID-19 in Ukraine’）は、ロシア侵攻下のウクライナにおける一日の COVID-19 感染数は3万件と推測される、としたうえで、診断については重症者しか把握できておらず、また、デジタルのデータ登録システムが動いていないため、感染者の登録もできていないと述べている。

一方、米国戦略国際問題研究所（CSIS）のレポート「パンデミック下の戦争：ロシアのウクライナ侵略の公衆衛生の側面」（‘War amid a Pandemic: The Public Health Consequences of Russia’s Invasion of Ukraine’）は、

エイズや結核に取り組む市民社会のサービスがしづとく運営されていることは指摘しながらも、もともと脆弱性が高かった保健システムが戦争により機能不全に陥っていることを指摘している。実際、ウクライナで治療にアクセスできている HIV 陽性者の割合は戦争前でも 50% 程度である。オミクロン株が南部アフリカで確認された際、その大規模な変異について、治療を受けていない HIV 陽性者の体内で連続して変異が生じたことが原因、と指摘されていたが、ウクライナやロシアは、アフリカに比べても、未治療の状態にある HIV 陽性者の割合が多いと考えられることから、変異株の発生の懸念には一定の根拠があると言わざるを得ない。

歴史の教訓：戦争は パンデミックの契機となりうる

ウクライナやロシア以外にも、多くの国々で、COVID-19 パンデミック下において激しい戦争や大量動員を含む政治変動が生じている。イエメンやシリア、リビア、エチオピア、サヘル地帯をはじめ、COVID-19 下で戦争が行われている地域は、ワクチン接種率が低く、感染を減らすための公衆衛生措置も行われていないか、極めて不十分な状況である。

歴史を振り返っても、第1次世界大戦とスペイン風邪の関連をはじめとして、世界規模の感染症と戦争にはしばしば強い関連がみられる。グテーレス国連事務総長は、COVID-19 のパンデミックが始まって間もない2020年3月23日、「COVID-19 下における地球規模の緊急停戦」を呼びかけた。その後、私たちは、デルタ株、オミクロン株など新たな変異株により、何度となく緊急事態の延長を余儀なくされている。これらに鑑みれば、現在交渉中の「パンデミック条約」に、「パンデミック緊急時における停戦の義務」を加盟国政府等に課す、という条項を入れる、ということを、市民社会として提案する必要があるのではないか。

（2022年5月22日）

出典：https://ajf.gr.jp/covid19_22may2022_2/

稲場雅紀：AJF 共同代表・国際保健部門ディレクター

第12回世界貿易機関 (WTO) 閣僚会議、 TRIPS 免除の議論に幕引き 極めて不十分な内容に市民社会の批判強まる

12th WTO Ministerial Conference failed to ensure equal access to medicines

6月12日に始まった第12回 WTO 閣僚会議は、2日間の延長の末17日に閉幕した。同会議では、食料安全保障に関わる閣僚宣言が採択されたほか、漁業補助金協定や電子商取引に関する作業計画その他が採択された。しかし、これらの決定事項は、いわゆる「グリーン・ルーム」⁽¹⁾に依存した決定プロセスともども、市民社会として受け入れられるものは少なく、貿易や国際保健に関わる市民社会の間には不満が渦巻いている。

2020年10月に南アフリカ共和国（以下、南ア）とインドが提出した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に関する提案は、未曾有の感染症危機に対応して、知的財産権の貿易の側面に関する協定 (TRIPS 協定) に定められた知的財産権を一定の包括性をもって時限的に免除する、という画期的な提案(以下、「TRIPS 免除提案」)であった。しかし、COVID-19 危機にあたって TRIPS 免除の実現を求めてきた市民社会は、閣僚宣言の内容の不十分さに対して、改めて強い批判を行っている。

閣僚宣言の内容は、本年3月にリークされた、TRIPS 免除提案に関する4か国協議（南ア、インド、米国、欧州連合）の暫定合意案に準じるものである。

(1) 部分的に免除される TRIPS 協定の内容は「特許権」のみで、南ア・インドが提案していた「著作権および関連する諸権利、意匠、開示されていない情報の保護」の免除は含まれていない。また、そのプロセスは、強制実施権の発動によることとなっている。「TRIPS 協定の柔軟性」をより包括的に拡大するというものではなく、製造された製品の輸出に関する規定について、この手続きを輸入国にとって、より簡便なものにしたということに限られる。

(2) 免除の対象は「ワクチン」に限られており、南ア・インドが提案していた、COVID-19 の治療・診断・封じ込めに関わるさまざまな製品は対象になっていない。途上国を含め世界全体での COVID-19 封じ込めにおいて、診断や治療、予防に関わるさまざまな物品の知的財産権免除が、ワクチンに劣らず重要なはずである。

(3) 対象国については、WTO の定義によるすべての「途上国」が対象となっている。ただし、ワクチン製造能力のある途上国については、TRIPS 免除権限を行使しな

いと誓約することが推奨される、としている。暫定合意案には「2021年におけるワクチン総輸出量の10%」以上を輸出していた「途上国」とあり、これは中国しかなく、事実上、中国を狙い撃ちしたものであった。今回の「閣僚宣言」をめぐる、最後まで残った論点はこの規定で、米国と中国の協議が長時間にわたって行われ、最終的に「権利は全途上国に認めるが、能力のある国は免除権限を使用しないと誓約を行う」という「オプトアウト」方式に落ち着いた。市民社会は、閣僚宣言の妥結に先だって、賛成しないように求める声明を世界298団体の署名を得て各国代表団に提出した。また、閣僚会議に参加していた市民社会団体は、会場外などで抗議行動を展開。妥結後には多くの市民社会団体が、閣僚宣言の内容を批判する声明を発表した。

長らく知的財産権と医薬品の課題に取り組んできたエレン・オーエン氏 (Ellen t'Hoen) を擁する「医薬品と法・政策」(Medicines Law and Policy) は声明で、この閣僚宣言は、南アとインドが提案した意味での包括的な TRIPS 免除ではまったくなくなってしまった、としたうえで、ワクチンの製造能力を有する途上国に、TRIPS 免除を活用しない強制力のある誓約を求めるのは、例えば世界保健機関 (WHO) が進める、mRNA ワクチンの製造技術の共有を促進する「mRNA ワクチン技術移転ハブ」などの仕組みに鑑みてナンセンスであり、これが診断や治療などにも適用された場合、問題はもっと深刻になる、と指摘した。

WTO での議論は、これで少なくとも一時的に幕引きとなるが、知的財産権をどうするか、この議論は WHO に関連して展開されている「パンデミック条約」に関わる議論など交渉に関わる議論などに土俵を変えて展開されることになった。

(1) 少数の国でつくるグループでの議題の事前討議

(2022年7月3日)

出典：https://ajf.gr.jp/covid19_03jul2022/

稲場雅紀：AJF 共同代表・国際保健部門ディレクター

2022年度会員総会のご報告と新共同代表ごあいさつ

会員総会・交流会のご報告

6月25日、東京都台東区の上野区民館で2022年度会員総会を開催しました。会場参加は3年ぶり、オンライン参加との併用は初めてでしたが、皆さまのご協力でトラブル等もなくすべての議事が完了いたしました。第1号議案から4号議案までがすべて承認され、2022～2023年度の役員が選出されました。質疑応答では事業報告書の「従事者人数」や「受益者人数」の考え方について、またアフリカで暮らすアフリカ

の人の会員の有無、予算における助成金増額の理由や事業収益の内訳などについて確認を行いました。

総会後は、5月のアフリカの日の声明やアフリカのプラスチックごみについて、アフリカ出身者の会員参加についてなどの意見交換を行いました。

AJF がこれからも会員の皆さまのさまざまなアフリカとのつながりから互いに学びあい、楽しみあい、考え、行動する場となるように活動を進めていきます。

報告／廣内かおり：AJF 事務局長

新共同代表：稲場 雅紀 Inaba Masaki



いなば まさき：1990年から日雇労働者の生活・医療相談、次いでLGBTの人権運動に関わり、2002年からAJF 国際保健部門ディレクター。2004～2009年、グローバルファンド（世界エイズ・結核・マラリア対策基金）の理事会に先進国 NGO 代表団メンバーとして参加。2014～2019年、「市民ネットワーク for TICAD」世話人。2021年から国際機関「UHC2030」の先進国 NGO 選出運営委員。共著書に「SDGs 危機の時代の羅針盤」（岩波新書）など。

先の総会で、共同代表に就任いたしました。2002年にAJFに参加して今年でちょうど20年となります。これまでは国際保健やTICADなどをテーマに、政府へのアドボカシーや、他の市民団体との連携・協力の面を中心に関わってきました。しかし、これからは共同代表ということで、これまでの取り組みにとどまらず、AJFの多様な取り組みにも何らかの形で関わっ

ていきたいと思っています。

コロナもあり、また、ウクライナ戦争を契機とした世界の変動もありで、日本もアフリカも難しい状況に差し掛かっていると思います。アフリカの仲間たちとも知恵を出し合って、この危機を乗り越え、持続可能な世界を目指していければと思います。ぜひとも、皆さまの変わらぬご支援、ご協力をお願いします。

新共同代表：玉井 隆 Tamai Takashi



たまい たかし：2020年度よりAJF 共同代表。東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部准教授。立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究所客員研究員。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学（博士（学術））。専門はアフリカ地域研究（ナイジェリア）、医療人類学。著書に「治療を渡り歩く人びと」（風響社、2020年）など。

共同代表として2期目を務めることとなりました。これからも、今まで以上に、精一杯がんばらせていただきます。皆さまのご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

唐突ですが、先日読んだ本の中で、2014年のシエラレオネにおけるエボラウイルス病の流行初期、多くの人びとが病気の存在自体に否定的だったなか、シエラレオネの著名な医師が亡くなったのをきっかけのひとつとして、人びとは病気を実感を以って認識し対応するようになったとの説明がありました。

最近、可視化されない、または実感が伴わない問題を、どうやって問題として形作るのかということを考えます。いろいろな分野・テーマで議論・実践されてきたことです。政策を設計する人びとの問題認識と、実際の

ローカルな社会で暮らす人びととの間で、認識が異なるのは当然ですし、また両者とも一枚岩ではられません。そこには「正解」があるはずもなく、多数派が「正しい」わけでもないです。例えば私が調査をする、ナイジェリアのいわゆる水上スラムの人びとが、海の汚染や海水面上昇を問題だと認識するのは容易ではないです。実感を伴う日常的問題はあまりにも多いです。

私は、問題ではないと拒絶せず、問題だと断言もせず、人びとの不安と、起こり得るかもしれない危機を考え想像したいと思っています。忘れられるのはいつも最も厳しい状況下に置かれるであろう人びとです。問題を簡単に説明しようとする力にはほとんど抗い、複雑なものをそのまま丹念に読み解いていきたいと考えています。



書評 Book Review

川本 晴夫 著

ニジェールのドクター・タニ 外科医 谷垣雄三物語

国際開発ジャーナル社

縦組み、265ページ、1,800円＋税

初版 2022年5月20日

ISBN978-4-87539-814-1

杉下 智彦

Sugishita Tomohiko

「とても羨ましい。外科医としてこんなに素晴らしい人生はないだろう」。アフリカに生きた奇跡の外科医、谷垣雄三先生の物語を読み終えて、まっさきに頭に浮かんだ感想です。同じアフリカで外科医として診療活動したものと、最後まで現役の外科医として生涯を終えることほど、冥利に尽きることはきっとないでしょう。

私は谷垣先生にお会いしたことはありません。しかし私が青年海外協力隊としてアフリカのマラウイ共和国に外科医として赴任した1995年に、ニジェールに赴任した同期隊員から谷垣先生のことを初めて聞いて以来、ずっと私の心の中で憧れの人でした。マラウイよりもさらに過酷なニジェールの地方で診療、それも外科医をしている奇跡。私も同じ外科医としてアフリカでの診療に戸惑い、悩み、翻弄される中で、薫をつかむように谷垣先生に送った手紙。そのお返事には「じつと耐え、焦らず、現地の人々から学びなさい」と記されていました。以降、20余年にわたって私もアフリカの各地で保健医療の活動に従事するようになった、そのきっかけを作ってくれた恩人であり、アフリカの師です。

術後の創傷治療、全身麻酔、周術期管理などでのたゆまぬ努力と革新的な工夫。著書の端々に記された谷垣先生の英知。しかし当時、携帯電話やインターネットはなく、私が信じるのは自分と現地の仲間、そして教科書のみ。重大な決断を下さなければならないときには、毎回神に祈るような気持ちになり、アフリカの地方で外科医をするということの奇跡を感じてきました。そのスリリングな感覚は、まさに今を生きている生命の躍動感にも似ており、谷垣先生をアフリカの彼の地にとどめていたのは、そんな外科医としての冥利に尽きるからではなかったのかと推し量られます。

また谷垣先生が心血を注いだニジェールの若手外科医の育成。外科医を育てるということは、この日本においても一日の休みなく研修医と過ごすことを意味しており、すべての急患や緊急手術の執刀に立ち会い、周術期に

間違いが起こらないように監督する必要があることを意味しています。私もマラウイで3,000例を超える手術を行いました。緊急の開腹術や開胸術、交通外傷、銃創、血管損傷による大出血や麻酔の事故などの医療的な緊急事態とともに、スタッフの不在、薬の在庫不備、停電や機械の故障など、日本からは想像を絶する野戦病院のような状況。若いクリニカルオフィサーたちとほぼ毎日病院に寝泊まりして周術期の管理をしなければならず、心労が絶えることはありませんでした。一言で人材育成といえども聞こえが良いのですが、命を預かる外科医の育成は、知力と体力の限界を超える卓越した人間力が求められ、おそらく谷垣先生には深いヒューマニティがあふれていたことを窺い知れます。

現代は、アフリカの地方においても携帯電話はつながり、インターネットで検索が可能な時代です。一方で、外科医としての本懐は、安心安全と引き換えにそのダイナミズムを失い、本来は人間のみならず社会を切り拓く外科医としての醍醐味は薄れていきます。寡黙な中でも芯がずっとまっすぐに通った「0.3ミリの道幅」⁽¹⁾の人生。冬山登山、学生運動、ニジェールでの葛藤などにおいても、常に自分を信じ、妻を信じ、仲間を信じ、現地の人々をまっすぐに信じた直線の人生。その鋭角的な感覚の鋭さを大切にして、心の豊かさを紡いできた谷垣先生の人柄が、私を含めて多くの人を魅了してきたことは間違いありません。

「外科医として羨ましい」、そんな谷垣先生への憧れの気持ちをますます大きくしながら、自分自身も悔いのない人生を送りたいと思う今日この頃です。谷垣先生ありがとうございました。そしていつまでもいつまでも、私の憧れとして燦燦と輝いてください。

(1) 「定規で引いた細い線の上を外れることなく進んでいく」ことの比喻

すぎした ともひこ：医師、屋久島尾之間診療所院長、東京女子医科大学客員教授。アフリカを中心に30ヵ国以上で保健システム案件の技術指導に携わる。2014年ソーシャル・ビジネス大賞受賞。2015年持続可能な開発目標（SDGs）国際委員。2016年医療功労賞受賞。2016年医療功労賞受賞。



アフリカ日本協議会 (AJF) 事務局から読者の皆さんへ 【ひとつの結び目として】

■ 昨年の11月から延期になっていた TICAD 閣僚会合は、3月26～27日にオンラインにて共催者とアフリカ50カ国、日本の民間セクター代表のみの参加で開催されました。アフリカおよび日本の市民団体は、国際機関、アフリカ地域機関、民間企業等とともに4月5日の「マルチセクターダイアログ（オンライン）」に参加しました。

■ アフリカンキッズクラブのインターンとして加藤優月さん、アフリカニュース収集インターンとして鈴木愛羅さん、小泉由依さんが新たに加わりました。

■ 夏の募金へのご協力をお願いします。助成金ではまか

なえない交流会やセミナー、情報発信などを柔軟に実施するにはご寄付が欠かせません。よろしくお願いします。

■ 5月25日に国際環境 NGO、350.org Japan と「アフリカの日に寄せて：アフリカの市民との連帯と気候正義の実現を求める共同声明」を発表し、メーリングリストで会員の方々からもさまざまなご意見をいただきました。AJF 以外の皆さんにも一緒に考えていただけるように、これらの情報やご意見をウェブサイトに掲載していきます。

廣内 かおり：AJF 事務局長

活動日誌（2022年3月1日～6月30日）

※の集まりはオンラインで開催。○はハイブリッド開催

- 3月1日 GII コロナ意見交換会（3/15、3/23、4/26、5/16、5/23、5/26にも開催） ※
- 3月7-14日 グローバルファンド増資アクションウィーク。米、英、カナダ、オランダ、ドイツ、ノルウェー各大使館を訪問
- 3月11日 ウェビナー「3.11に考える持続可能性への新しい道」（主催：新型コロナに対する公正な医療アクセスをすべての人に！連絡会） ※
- 4月5日 TICAD8 マルチセクター・ダイアログ（共催：外務省・UNDP） ※
- 4月11日 TICAD-NGO 連絡グループ会合（4/25にも開催） ※
- 4月14日 PARC 自由学校との共催連続講座「来るモノ・行くモノを通して考えるアフリカと日本」（4/28、5/19、5/26、6/9にも開催） ※
- 4月19日 アフリカニュース収集定期ミーティング（5/10、6/14にも開催） ※
- 4月23日 FAO の資料を読む学習会（5/27、6/26にも開催） ※
- 4月27日 GII/IDI 懇談会（6/23にも開催） ※
- 5月12日 「緊急開催！コロナ時代のグローバルヘルスへの日本の取り組みに関する緊急院内集会」（主催：院内集会実行委員会） ○
- 5月13日 2022年度第1回理事会 ※
- 5月15日 アフリカンキッズクラブ「じゅりあ先生とアフロダンスをおどろう！」 ※
- 5月25日 ウェビナー「コロナ禍における在日外国人の健康問題を考える」開催（主催：NGO 労組国際協働フォーラム） ※
- 5月25日 新型コロナと知的財産権に関する映像制作・企画会議 ※
- 5月25日 「アフリカの日に寄せて：アフリカの市民との連帯と気候正義の実現を求める共同声明」を 350.org Japan と発表
- 5月31日～6月2日 ドイツにてグローバルファンド提言者ネットワーク（GFAN）戦略会議（稲場、小泉が参加）
- 6月14日 2022年度臨時理事会 ※
- 6月25日 2022年度会員総会 ○
- 6月26日 アフリカンキッズクラブ×アフリカニュースミートアップ「ユースと話すママ会」 ※
- 6月26日 TICAD に関するアフリカ・日本市民社会とのダイアログセッション参加（主催：UNDP） ※

◎メールマガジン「AFRICA ON LINE」を毎週月曜、『グローバル・エイズ・アップデート・プラス』を毎月発行。会報『アフリカ NOW』119号を3月末に発行。「アフリカ情報アーカイブ」を毎月更新（<https://ajf.gr.jp/archive/>）

◎会員財政委員会（4/18）、事業委員会（4/7）、広報委員会（4/12） ※

アフリカ NOW no.120 2022年8月発行

発行：特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会

発行責任者：稲場 雅紀、玉井 隆

編集責任者：茂住 衛

印刷：(有) 山猫印刷所

定価：500円(税込)

特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会

〒110-0015 東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル3階

TEL 03-3834-6902 FAX 03-3834-6903

URL <https://ajf.gr.jp> E-mail info@ajf.gr.jp

【郵便振替：払込取扱票】 00120-3-573276

【銀行口座】 三菱 UFJ 銀行上野支店（普）5305887

※口座名はいずれも「特定非営利活動法人アフリカ日本協議会」